ヒマラヤ学誌　*No.9, 135-140, 2008*

チベットを高地文明論としてとらえるために
～「自然学」から「チベット文明」への旅

斎藤清明
総合地球環境学研究所

総合地球環境学研究所（地球研）の研究プロジェクト「人の生老病死と高所環境～三大『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」（通称、「高地文明」プロ）が、予備研究から本研究に向けてすすんでいくなかで、研究目標がはっきりしてきた。

本研究は2008年から2012年まで5年間の計画。高地における人間の生き方と自然および社会経済環境との関連を、世界の3大高地といわれるアンデス、ヒマラヤ・チベット、エチオピアで調査研究を行い、比較していく。ようするに、「高地文明」というものの解明である[1]と、私はかんがえる。

この研究プロジェクトの予備研究に、私は「自然学班」として加わり、「高所環境と自然学～自然学の可能性」というテーマをかかげた。それは、今西錦司が提唱した「自然学」を、高地の人々の自然観を調べることによって展開させようというねらいであった。そのために、まず「自然学」というものを検討した[2]。

そのうえで、「自然学」を展開させて「高地文明」プロに加わっていくためにどうすべきかを考え直してみた。そうして、私にとっては馴染みのあるチベットを、高地文明としてとらえてみようとおもった。

チベット再訪

私は、チベットには四半世紀前から、しばしば訪れている。最初は1982年のことだった。当時は外国人に開放されて間もない頃で、ヒマラヤをめざす登山隊にも開かれたばかり。チベット側から未踏峰をめざす先陣争いに京都大学学士山岳会も加わり、その隊に私も参加した。その後、1984年と1990年にも学術登山隊や調査隊に加わって、広くチベットを見聞することができた。

それから17年ぶり。2007年夏、チベットを久しぶりに再訪した。ネパールの首都カトマンズから陸路、国境を越えて中国チベット自治区に入り、帰路は話題の青蔵鉄道に乗ってみた。いまや、チベットは観光ブームなのである。

これまでの私のチベット行は中国の近隣の省を経由して訪れている。最初の1982年（カンペンチン登山隊）は成都（四川省）から空路ラサへ、1984年（ナムナニ峰偵察隊）はカシュガル（新彊ウイグル自治区）から陸路で、1990年は依田恭二隊長の大阪市大調査隊に同行して西寧（青海省）から陸路ラサへ、といったぐあいに。それぞれルートは異なっていた。当時のチベットをはば広く見ることができた。とくに1984年にはチベット自治区の西端に入域でき、カン・リンポチェ（カイラス）も巡礼した。その際に、インドからの巡礼者を除くと外国人として初めて正式の許可（中国登山協会）を与えたといわれたものだ。

今回で4回目のチベット行となったが、しばらく見ぬ間のチベットの変容ぶりに驚かされたので、まず、その紀行を紹介しておこう[3]。

中ネ国境は深い谷間

チベット（中国チベット自治区）に入るには、団体ビザを取らねばならない。個人のチベット旅行を中国は認めていないのである。そのために、カトマンズの旅行社にツアーを組んでもらい、ビザも駐ネパールの中国大使館に申請した。ところが、出発前日になって同じツアーを組むことになっていた米国人4人組にはビザが発給されなかった。理由ははっきりしなかったが、ときどき入国者数を制限しているようだ。

2007年6月16日（土）、カトマンズを4輪駆動車で出発。初日は、国境を越えた中国側の入口、ザンムーまで。そこから4日間かけて、高原地帯をラサまで走る。距離はざっと1000km。高さ5000m余りの峠も3カ所ほど越えることになって

e-mail: saitok@chikyu.ac.jp

いる。

昼過ぎ、コダリに着いた。両側に山が迫る、渓谷にくっ着くように集落がある。背後に中国側の国境の町ザンムーが望まれるが、かなり上部に見える。高度差は600mもある。

国境の手前の川沿いに駐車場があり、たくさんのトラックが幌をかぶせて停まっていた。物流の盛んな様子が伺われる。もっとも、イミグレーションの建物で目立つのは外国人の姿である。バックパッカーの欧米系の若い人たちやインド人の巡礼者もいる。

ネパールを出国すると、すぐに橋（友誼橋と呼ばれる。中国が管理していて、撮影禁止）がある。荷物を担いで、歩く。渡ったところで、検疫。体温計を額に押しつけて測られた。ここで、中国側のガイドと車が待っていた。

英語を話す37歳のチベット人の男で、二十歳前にインドに行って6年間暮らし、チベットに戻ってガイドを10年余りやっているそうだ。敬虔なチベット仏教徒と見受けた。車はトヨタのランドクルーザー。運転手は漢族で、中国語しか話さなかった。

つづら折りの坂道をぐんぐん上って、ザンムーの町。手前にネパールのトラックが長蛇の列をなして片側に停まっていた。町の入口で、入国手続き。カトマンズで2枚もらった団体ビザを示すと、1枚に入国スタンプを押して返してくれた。地元の人たちは身分証明書を見せるだけで往来している。

雨雲を抜け、乾燥した世界

ザンムーの町は標高2350mというが、町の端と端とではかなり高さが違いそうだ。一本の坂道に沿って建物がびっしりと建っていて、4輪駆動車が片側にずらりと並んでいる。　17日（日）午前3時半、雨の中、まだ寝静まった街を我々の車は出発した。悪路なので、渋滞に巻き込まれないようにと。確かに、ひどい路だ。断崖に沿って、凸凹あり、ぬかるみあり、だ。それでも、高度を上げていくのがわかる。

ところが、半時間余りで停車。前が渋滞しているようだ。真っ暗闇。我々のランクルの脇を濁流が渦巻いている。そのまま、4時間ほど待たされた。夜が白みだしてわかったが、20台ほど前の大型トラックの後輪が、道路脇に落ちかけて停まっていた。

やっと動き出し、ぐんぐんと高度を上げていく。次の町であるニャラムは標高3750m。この約30キロの間に高度を1400mも稼ぐのである。夜明けとともに、道路補修工事が始まっていた。作業員は道路脇でテント暮らしのようだ。この悪路の補修は、たいへんなものだ。そして、トラックと4輪駆動車の長蛇の流れ。渓谷の街道は生き物のようであった。

1時間も走ると、渓谷の上部の山肌に陽差しが当たる。谷の上は晴れている。いつの間にか、樹林帯を抜け、もう岩山ばかり。道端の草地にはヤクもいる。10時40分、ニャラムに着いた。新しい町のようだが、やっとチベットに入ったという感じ。給油し、食堂で朝食をとる。

道もよくなった。舗装はしていないが、硬い地道である。ゆっくりと坂道を上がっていく。すっかり乾燥した世界になっている。谷間には緑の畑。鮮やかな彩りである。

急な坂道になり、右手後方（南東方向）に雪山が見える。ラブチ・カン（7367m）の連なりだろう。タルチョーがはためく峠についた。タン・ラ（5050m）。広い台地上になっている。西のほうにも雪山が連なる、あれこそヒマラヤだ。

その中で、一番大きいのをシシャパンマ（8012m）だと、ガイドがいう。確かに、そうだ。見覚えがある。25年前、すぐ近くのカンペンチン（7281m）に登ったとき、毎日飽かずに眺めたものだ。さらに、西に目をやる。カンペンチンが、くっきりと見える。頂上直下の広い雪面と尖った西峰が、よくわかる。記憶がよみがえる。1982年3月末からひと月余り、京都大学学士山岳会の仲間とともにあの山に挑み、初登頂し、麓の遊牧の村を訪れたものだ。

高地でも豊かな穀倉地帯

峠を下ると、いっそう緑の畑が目立つようになる。チンコーと呼ばれる大麦である。チベット人の主食となる。山々はみんなハゲ山だから、畑が余計に麗しい。

ティンリーの集落にかかると、南の彼方にチョモランマ（エベレスト）山群がそびえてみえる。黒々としたエベレスト（8850m）北壁、鋭い三角

形のプモリ（7161m）、たっぷりと雪をかぶったチョーオユー（8201m）と、ぜいたくな眺めである。昼食の食堂でツァンパ（麦こがし）とバター茶を頼んだ。

驚いたことに、ここから舗装道路になった。まだ、真新しいアスファルトである。4輪駆動車や乗合いバスがぶっ飛ばしていく。地元の人たちの耕運機や馬車を追い越して。

一番高い峠のラクパ・ラ（5220m）も一気に越えたが、欧米人が二人、自転車でやってきた。たいしたものだ。

ヤルツァンポの流域に入って、ラチェで泊まる。4輪駆動車に分乗した欧米系の旅行者用の宿だが、シャワーもなかった。部屋の片隅にバケツと洗面器のみ。

翌18日はシガチェ、19日はギャンチェに泊って、20日にラサに着いた。

このルートは、25年前とほぼ同じであったが、信じられないほど道路がよくなっていた。以前は埃だらけになったのだ（もっとも、道班ごとによく手入れはされていたが）。電信柱も日干し煉瓦からコンクリート製に替っている。

それでも、シガチェからギャンチェのあたりは、豊かな穀倉地帯であることには、変わりはないようだ。

チベット第2の都市とされるシガチェでは、前にはなかったタクシーも走りまわっている。建物も大きく、新しくなり、表通りは都市そのものである。以前は外国人の泊まれるホテルなどもなく、招待所だけだったのだが。

中国石油のガソリンスタンドもある（前は、軍から配給のガソリン券で給油していたのに）。1リットルが5.19元（約95円）である。また、町中だけでなく、道路わきの集落も新しい建物が目立った。そして、標識には中国語で村の名前が大きく出ている（チベット文字は小さく）。

あふれる観光客

シガチェといえばタシルンポ寺である。パンチェン・ラマがそのトップで、ダライ・ラマが亡命していないチベット自治区にあって、その存在は大きいが、第10世は1989年に亡くなった。その転生霊童をめぐって、ダライ・ラマ側と中国政府側が認定した少年は異なった。それからというものは、ダライ・ラマ14世は中国側からいっそうの非難を浴び、14世の写真も自治区の寺院から一掃されたという（前回には写真をよく見たが、今回はみつけられなかった）。

タシルンポ寺も25年前に訪れた時とちがって（いや、境内の「民主管理委員会」の看板は同じであったが）、すっかり観光寺院のようになっていた。門前の駐車場にはバスがあふれんばかり。お守りを売ったり、携帯電話と戯れる少年僧もいた。そして、金ぴかの十世霊塔。中国政府が大金を投じて、歴代の霊塔に遜色ないのを作ったのだ。11世に認定された少年僧の写真も飾っている。

きれいに整備された大寺院ではあるが、出会う僧侶たちには精彩さは感じられなかった。寺の前のホテル、剛堅賓館に泊まったが、これは寺に付属する企業の経営だそうだ。商売には熱心なようだ。

古都、ギャンチェへ。前回、立ち寄れなかったので初訪問である。パンコル・チョルテンと呼ばれる巨大な仏塔を参拝した。8階建ての6階まで、右回りに登った。数十もの部屋に数えきれない仏像や壁画がある。極彩色の世界。タントラ（密教経典）が成立していった過程が示されているそうだ。まさに、立体マンダラ。無数とも思える仏たちの姿に、チベット仏教の奥深さを感じた。

ラサの変貌

ラサに近づくと、たいへん交通量が多くなった。新しい観光バスも行き交っている。道路脇の畑にも、チンコームギよりも菜の花や野菜が目立ってきた。ビニール・ハウスもある。これらの作物は、在来のチベット人の需要ではなく、新参の多くの漢族の人たち用だという。

道路も立派だ。空港へ近道するハイウェイもできている。市内に入ると、片側三車線の直線道路となった。そして、新しい鉄道駅へと、広い橋がかかっている。

銀行、ホテル、デパートの大きなビルが林立する街中からは、ラサのシンボルのポタラ宮さえも見えにくくなっていた。以前はポタラ宮の前には古い家もあったが、すっかり整備され、天安門広場をおもわせる広場もできている。

そして、前日に予約しないと入れないポタラ宮では、漢族のガイドが甲高い声で案内していた（そ

の案内の内容もチベットの歴史を中国側に偏って、とチベット人ガイドがいう）。また、壮大な宮殿の中ではいたるところで工事をやっていて、きれいにはなっていた。しかし、けばけばしい感じがする。

郊外にある名刹のデプン寺とセラ寺も訪れた。文化大革命での破壊から修復したといい、たしかにきれいになっている。かっては学問寺とされたが、いまや観光寺院ではないか。セラ寺の僧侶たちの問答光景は有名だが、観光客がさかんに撮影する有り様。

もっとも、旧市街の真ん中にあるジョカン寺への参拝者の熱気には変わりがない。門前で五体倒地の祈りを繰り返す多くの人々。早朝からの多くの巡礼など、あつい信仰を集めている（1990年5月、ラサの戒厳令が解除された直後に訪れた時、武装した警察隊が見張っていたものだ。今でも祭事で大勢のチベット仏教徒が集まってくると、厳しい警戒になるそうだが）。

青蔵鉄道の影響

チベットの変貌ぶりのきわめつきは青蔵鉄道である。1年前の2006年7月に開業し、たいへんな人気である。とくに寝台車（1等と2等）が、裕福な漢族と外国人の観光客に。普通車（硬座）は出稼ぎの漢族や巡礼のチベット人が多いようだ。

6月23日（土）午前11時20分、ラサ発西寧行きに乗った。2台の米国製気動車に曳かれた15両編成である。この日のラサ発の客車は3本。上海行き（10時発）と重慶行き（10時45分発）、そして私たちの乗った西寧行き。隔日で北京行きや広州行きもある。途中の駅で何本もの客車や貨車とすれ違ったから、かなりの物流を担っていることになる。

この鉄道といい、ラサから地方への道路の整備はじめ、中国はたいへんな投資をチベットに行っている。そして、たしかにチベットは変貌しているのだが、それはまるで札束でほっぺたを叩いているようにも、みうけられるのだ。

列車の中で青海省のチベット族の女性が話してくれた。母親をラサ巡礼にと、寝台車に乗せようとしたら「昔は歩いてお参りしたのに、寝たまま行くなんて」と嫌がったそうだ。

ラサで乗車して、まる一日後、青海湖が見えた。もうすぐ西寧。やかましい車内放送ともお別れだ。この、広い湖の周辺は高原になっていて、遊牧のチベット族が多かったそうだ。かってのチベット文明の広がりを想った。

ラダックへ

チベットには古い歴史があるが“神秘の国”といわれ、近代になっても外国人にはなかなか入国がむつかしかった。ヘディンなどの著名な探検家もラサには入れなかったし、日本人もごくわずかの僧侶などに限られていた。戦後は中国の自治区になったが、しばらくは以前と同じように外国人には閉ざされていた。やっと1980年ごろから緩和されたのである。

さきのチベット再訪では、しばらく見ぬ間の変化に驚かされた。そして、変わりゆくチベットを目の前にして、きびしい環境のなかで続いてきた文明が、これからどうなっていくのか、気になった。そこで、2ヶ月後の2007年8月から9月にかけて、かってのチベットをしのぼうと、ラダックを訪れた。

ラダックはインドの最北部にあるが、古くからチベット文化圏にあったとされる。今日のチベットが中国の自治区として変貌していく一方で、ラダックにはチベットよりもチベットらしさが残っているといわれる。ラダッキというチベット系の人々が住み、チベット仏教を篤く信仰している。チベットからの難民も多い。

地形的にも大ヒマラーヤ山脈の西端の裏側に位置し、北側のカラコルム山脈との間に挟まれた奥深いところである。インダスの流れもこの奥に発して山々を縫い、遠くアラビア海に向かっていく。中心都市レーの標高は3500mで、ラダックの大半が標高3000mを越える山岳と高原地帯である。

ゴンパを巡る

こんなに奥深い地に、いや地球の僻地ともいえるようなところだからこそ、チベットの文化がよく残っているのかもしれない。その象徴ともいえるのが、チベット仏教のゴンパ（僧院）である。

ラダックへの外国人観光客のお目当ては、これらゴンパとそこで催されるお祭りだろう。仮面舞踊に人気があって、映像や写真でよく紹介されるが、私たちが訪れたときは、そのシーズンではな

かった。それでも、いくつかゴンパを見て回った。

ある日、レーからインダス川の上流に向かった。車で1時間余りで、ヘミス・ゴンパ。ラダック最大のゴンパといわれ、その祭りの賑わいはすごいらしいが、今はひっそりとしている。どのゴンパも普段はそうなのだろう。豪壮な建物と立派な仏像よりも、壁画が印象的だった。

周囲は荒涼たる山肌だが、谷間には緑がある。支流沿いにさらに半時間ほど走ると、岩山の上に砦のようなゴンパが現れた。チェムレ・ゴンパ。麦の刈り取りが終わったばかりの畑の向こうに、小さな集落の背後にそびえている。山腹には僧房がたくさんある。麓には寺小屋のような小学校も。

インダス上流へのゴンパ巡りの帰りに、レーに近いティクセ・ゴンパに寄る。まるで、お城のようだ。いくつものお堂をめぐり、最後に立ち寄ったのが、真新しいお堂。それでも、ゆったりとしていて、気持ちが安らいだ。

ダライ・ラマの説教を聴く

レーは、かってのラダック王国の都。その王宮跡が、街のなかにそびえている。ラサのポタラ宮のモデルになったともいわれる壮大なものだが、外壁だけが残り、内部は廃墟である。登ってみると、観光用にするためだろうか、上層部の内部を修復していた。

レーを去る前日、ラダック・フェスティバルが始まり、街頭パレードを見物できた。ラダックの各地から集まった、さまざまな民族衣装のグループが行進し、これほどバラエティがあるのかと驚かされた。厳しい自然環境のなかで、いろんな人々が暮らしているのである。

パレードの最後は、ダライ・ラマ14世の大きな写真を掲げた車列だった。篤い信仰がうかがえた。ダライ・ラマはたびたびラダックを訪れており、この夏にも来たそうだ。

その際にダライ・ラマが大勢の人々に説教をした、チベット難民集落に近い広場の側に、私たちは宿をとっていた。そこでは、難民たちの苦労話も聞くことができた。

そして、ラダックからの帰り道、ダライ・ラマが常住する、ダラムサラを訪ねた。ちょうど、ダライ・ラマの公開説教が3日間にわたって行われていた。世界中から集まった数千人の信者に、英語もまじえてよどみなく語りかける姿は、なかなかの迫力だった。

今なぜ、高地文明なのか

この「高地文明」研究プロジェクトとして、自然学の立場からの高地の人々の自然観の研究も興味のあるテーマだが、チベットを旅してみると、今は、急激に変貌しつつあるチベットを直視する必要があるとおもえてきた。

チベットの変容として、まず指摘されるのは、中国からの人口流入である。かってのチベットの範囲に現在居住するチベット人600万人に対し、中国人は750万人にもなっていると、ダライ・ラマ14世の亡命政府はいう。このままでは、チベットのアイデンティティや文化は滅んでしまいかねない、と。

高地への人口流入は、別の視点からもとらえる必要がありそうだ。チベットのラサでの人口急増だけでなく、南米ペルーのクスコでも同様の現象が起きているそうだ。アンデス文明のインカ帝国の中心だったクスコは標高約3400mの高地であるが、今日ではスラム街ができるほど、人口増が問題になってきたというのだ。

これは、現代は歴史上でも「高地に住む」時代になってきたことも意味しているのではないだろうか。高地のほうが病気になりにくいなど、住みやすい環境だと認識されるようになったためだろうか。高地で古代から文明が興ってきたことを考えると、興味ある問題である。

また、チベット文明はどうなるのかという問題は、「人はなぜ高地に住むのか」ということとも関わってくるであろう。「高地文明」としてのチベット文明の意味は、やりがいのあるテーマといえよう。さらに、「高地文明」の比較文明論も、必要となってくるだろう。

最後にひとこと。帰国後に手にした岡田裕成・斎藤晃『南米キリスト教美術とコロニアリズム』（名古屋大学出版会 2007）は、興味深かった。征服者たちの信仰と深く結びついたキリスト教美術は、どのようにして植民地に移植されたのか、そして先住民たちは、それをどのように受け入れ、理解したのかが、よくわかる労作である。

そこには、先住民が立役者として関わる「もうひとつの植民地美術」が、スペイン人植民者が集

中する都市ではなく、都市の外部に広がるもうひとつの空間、先住民が人口の大多数を占める空間に、生まれていたのである。

現在のチベットの姿が重なってくるようであった。

参考文献

1) 山本紀夫：「高地文明」の発見『論壇　人間文化』第 2 号 (2008)
2) 斎藤清明：「自然学」はいかにして提唱されたのか～今西錦司の学問について『ヒマラヤ学誌』No.8 2007
3)「自然学をめぐる旅」と題した『日本熱帯生態学会ニューズレター』No.68 (2007) から一部を再掲する。